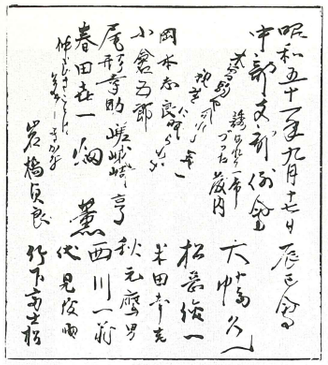
胸一ぱいに吸う。異口同音に空気がうまいという。そして素晴らしい槍、穂高の連峰に一行は盛んにシャッターをきる。御嶽の七合目田ノ原に到着。

目前に相対する御嶽山は独りそびえる大きなお山。美しく個性豊かなお山、峠の王国に君臨するお山。流石に巷間信仰篤いお山と感嘆これ久しくしお山のふところを暫し散策、時の過ぎるのを忘れた。

約一時間後お山に別れて下山、谷底の町木曽福島に引返す。旧幕時代日本三大関所の一つ福島宿、関所跡にある車屋に入る。有名なソバに腹を満たせ暫時休息、留守宅への土産ソバ饅頭等求め、午後二時四十二分特急しなの号に乗車帰路につく。

参加者平均年令七四才強とは思えぬ元気で疲れもみせず、きてよかった、登ってよかったと満足感にひたり、二日に亘る予定の行楽を終え名古屋駅で又の機会を約して散会した。



終りにこの企画や実施にあたり伏見幹事の並々ならぬご尽力に敬意を表してペンをおく。（竹下記）

**★参加者氏名**

大幡久一　柳田義一　米田幸吉
松岡俊一　小倉五郎　嵯峨崎亨
畑　薫　藤内金次　岩橋貞良
春田喜一　岡本志良　尾形幸助
秋元鷹男　西川一蔵　伏見俊助
竹下富士松（以上十六名）

## まさに幸福な生涯

**帝人株式会社社長　大屋晋三**

藤原長司君は少年のころ、今を去る六十年前、鈴木商店にいわゆるボンさんとして、私より三年ほど早く入社し、主として繊維の販売を担当していた。

その一方で私は、やがて帝人に移って、岩国に近代的な大工場を建設したのであるが、それが昭和二年四月あたかもフル生産を開始した時に、親会社の鈴木商店が破綻したのであった。そこで岩国工場を中心として生産された帝人の糸を売りさばくため、帝人が直接に販売機関を持つ必要が痛感された。当時、鈴木商店の青年社員として、人絹販売を担当していた下関支店京都駐在の千葉順一、東京支店の小橋一水、名古屋支店の藤原長司の三君をして、これに当たらせたのであった。

ことは急を要するので、新しく会社を設立する余裕がなかった。たまたま帝人の広島工場に、鈴木商店下関支店の翼下につらなる広島撚糸工場があり、この工場なら今後債権の対象にはなるまいからと、商店の名称にこれを使用することとなったのである。そして工場では商売には不向きだからと、『広島撚糸商会』と名づけたのである。

なおこの広島撚糸工場は大正十三年、千葉順一が中心となって、人絹撚糸界の大先覚者石田宇之助の技術と機械設備とを用いて設立したもので、帝人広島工場の等外品の糸を撚糸加工して売りさばいていた。しかしまもなく機械設備を大津に移して、当時は建物を残すのみであった。

広島撚糸商会は、本店を京都に置き、千葉順一がこれを主宰して、同時に京阪神地区の販売を担当し、藤原長司は名古屋に駐在して岐阜・一宮・浜松地帯を、小橋一水は東京に駐在して両毛・米沢地帯を担当した。その集金が三万～五万になると、これを古新聞に包んで神戸の本社へ直接持参し、わが社の急場をしのぐのに大きな貢献をしたのであった。

こうして私は藤原君を、他の二君とともにその青年時代から五十年にわたって、知悉しているのである。当時私は、この三君を観察して、千葉君は豪放磊落、いかにも男らしい人物ではあるが、緻密さに欠けるので、大成はむずかしいと見たのであった。はたして彼は、一時は巨富をなし、花柳界等では男の中の男と讴われたものであったが、あまり度を過ごして、ついに終りをよくしなかった。

これに反して小橋君は、地道な人ではあったが大した特徴はなく、私は初めから期待しなかったし、またこれといった仕事もしてはいない。

ところで藤原君は、人間として底力があり、商機を見るに冷静かつ読みが深く、しかもものを締めくくることを知っていた。そこで私はその当時から、結局は藤原君が一番大成すると予測していたのであったが、その見るところに誤りはなかった。

さてこの広島撚糸商会は、正式には会社ではなく、匿名組合のような形で経営していたが、その後この三君はそれぞれに分離して独立した。そして藤原君はやがて北陸機業地が人絹織物の中心地であることに着目して、昭和五年四月、本拠をここに移して『福井広撚商会』を創業したのであった。

これが現在の『広撚株式会社』の発端であるが、開店当時の陣容は社長の藤原君を含めて五名、電話一本、三輪自転車一台、自転車二台のまことに微々たるものだったそうである。それが藤原君の着実な性格を反映して堅実な経営をつづけ、逐次その地歩を拡大して、ついに現在のように北陸の商社間で、最高の資産内容を誇るまでに発展したのであった。

ところで化合繊、なかでも化繊は、その相場の変動が非常に激しいので、これに従事する人の興亡には、実に甚だしいものがある。そのために業界では『錦を着たりボロ着たり』と、よくいわれているのである。それを藤原君は、この変動の激しい事業に従事しながら、いかなる不況期に際会しても、かって業績を動揺させたことがなく、また偉なりといわなければならない。

さらに藤原君の人柄は、実に情愛が深く、人の面倒をよくみたものである。いまを時めく自治大臣の福田一君にしても、その今日を築くのについては、藤原君の親身な陰の力が大きくものをいっているのである。これはかって藤原君が、私の参議院議員選挙について、献身的に尽くしてくれたことからも、よく察知できるところである。



またかっての同僚が失意に沈んでいる場合、取引先が困っている場合などには、常に暖かい救援の手をさしのべていたのである。しかもその手は、ただに当人だけに限らず、その子弟や遺族にまで及んでいた。

君は徒手空拳にして立ち、一布衣から商人として大成した立志伝中の人物である。しかも常に人から慕われ、かって人から指弾されたことがない。また家庭的にも恵まれ、温良貞淑な夫人にかしづかれ、さらに子息は優秀であって、よく君の事業を継ぎ、そこには後顧の憂いは少しもないのである。まことに君の生涯こそは、幸福なものであったといわなければなるまい。

昨年四月二十四日逝去された藤原長司さんの「藤原長司を偲ぶ広撚四十五年史」が、この程御令息　広撚社長藤原　隆さんから贈って来られた。地味な優れた装禎の刊行を掌にしては今更ながら故人の人間味豊かなようすが、追憶しても忍び切れないものを悟らされた。そこでこの中から帝人社長大屋晋三さんの稿をそのままこの号に頂戴することにした。（編）

## あゝ黄旗くん!!

**西川政一**

**――あの溌剌たる君が――**

辰巳会の幹事会に昨今顔を見せることが少ないというので、大阪の諸君が非常に物足りなく感じていたが、私も同君が病臥だと聞いて、一日も早く元の元気な顔を見せてくれる様にと祈っていた処、思いもかけぬ訃報に接して愕然とした。先に嶋内君が突然に顔を見せてくれなくなった直後だけにその驚きは一層であった。嶋内君の死を悼んで、木畑君が〝たつみ〟紙上で色々と思い出と追憶の記を書き、又その人一倍の辰巳会に対する努力と熱意のほどを書いて冥福を祈ること切なるものがあったのに、今やその地位を変えたことは私共二倍三倍の悲しみを味わうものである。

嶋内君の場合、私は丁度国際会議のためローマへ行っていたので失礼していたが、のち、仏前に参じた時、奥様はじめ御家族の御愁傷の様、又同君が平素どんなにか辰巳会のことを考え、又その努力を払っていてくれたかなどお聞きするに及んで、私自身も一入憂愁の気分に閉されたのであった。

今回の場合、私は内地にこそ居たが、すぐには間に合わず漸く数日後西下の機を得て高槻のお宅におまいりした。今なお香煙たちこめ、同君の元気そうなお姿も写真の上ながらいきいきと語りかける様であった。御遺族　のお一人が「西川さんがおまいり下さったよ」と生ける人にもの言う如く……。並いるみんなはただ無言のまま暗涙にむせんだ。

ほんとうに木畑君は辰巳会のためには真剣であった。そして辰巳会をこよなく愛してくれた。同君御所有の貸ビルも当然木畑ビルと云うところを〝たつみビル〟と称し、同君の配慮から巽と云う字を使っていた。ことほど左様に彼は辰巳会を愛し、又慎重であった。

又彼が〝たつみ〟の編集を重視して柳田義一君を援助していたことは、毎号の〝たつみ〟の目録を一読しただけでも判る。〝たつみ〟のためにはどんな苦労も厭わないという気概強く、今同君を失って、関係者一同がどれ位落胆していることであろうか。特に私としては、岳父の頌徳碑建立に際し、何人も出来ない様な力を注いでくれて、見事に由緒深い六甲の丘に完成したことは、常に我々の感激の泉である。

鈴木商店時代、彼が横山保険部長の下で、江本君と共に奮闘していた姿が想像されて、今あの世でお二人と語り合われている姿を思い浮べ、はるかに深く深く冥福を祈るものである。

**（追記）**御長男は今、教鞭をとっておられると云う。私も鈴木にはいる前「代用教員試験」を受けて見事失敗したことがあるが、もともと教育に対する興味は非常に深いので、いろいろこの問題について仏前でお話をした。希くは令息の大成を祈るや切なるものがある。木畑君!!どうか御令息を守り給え!。

## 木畑龍治郎君への弔辞

本年二月風邪がこじれられ高槻市医大病院に御入院、極力御加養に努められたのにもかかわらず病勢衰えることを知らず遂に厚き御家族の御介抱をも裏切り空しくも去る十一月七日午前八時二十六分眠るが如く大往生を遂げられました。行年七十二才。次いで翌八日午後二時より自宅に於いて厳粛なる告別式が取り行われました、会葬二百名以上を数えたことも御生前、各方面に尽くされた御仁徳の然らしむるところ、一同暗涙に咽んだことでした。

当日柳田幹事本会を代表して謹しんで弔辞を霊前に捧呈申し上げました。

### 弔詞

**木畑龍治郎君**

人の世の定めとは申しながらこのあいだまであんなにまで元気であった君が病魔の冒すところ鬼籍に入られたとは云え、この哀しみは最も堪えがたく何時の日かこの胸の痛みが医やすことが出来るでしょうか　嗚呼……

君とは鈴木商店に御入社以来共に会計部に机を並べて若き日を愉しみ、柳田済美寮から早朝競って再度登山に健脚を誇ったことでした。のちに保険部に転ぜられ、横山正躬氏のもとに多大の信頼を集